



【ピオトル・パレチニ先生特別レッスン】

～ピアニストではなく芸術家であれ！～

世界で活躍されるピアニストでありショパン音楽大学教授、そして「ショパン国際ピアノコンクール」をはじめ、数々の著名なコンクールの審査員でもあり、今年5月に日本国政府から旭日中綬章を叙勲された P.パレチニ先生による特別レッスンが行われました。

常に世界の一流の現場で活躍されているパレチニ先生からのご指導は、院生自らが深く考え、自身と向き合う、かけがえのない時間となりました。

レッスンでは、先生ご自身がすぐにその音楽に入り込んで深く集中される姿に我々は圧倒され、本当に素晴らしいレッスンをして下さいました。パレチニ先生は「普段は僕は生徒自身のアイデアを自分に見せるようにと言っている。まず自主性を持つこと、レッスンでは言われたことを直すだけでは足りないのだということ、

もっと自分で楽譜から学ぶ方法を知ることが重要。」など、音楽の真髄を熱心にご指導下さり、修了後に音楽家として独り立ちし活動をしていく大学院生にとって、最も大切なことを学ぶことが出来ました。また、「ピアニストではなく芸術家であれ!!」というお言葉からは、我々教員も改めて音楽との向き合い方を考える貴重な時間となりました。

パレチニ先生は洗足学園のことをとても気に入って下さり、先生ご自身も校内の写真を撮られ、ご自身の Facebook に投稿して下さいました。

(通訳:江崎昌子先生)

パレチニ先生特別レッスン・レポート 大学院2年

10月15日、ピオトル・パレチニ先生の特別レッスンを受講させて頂きました。

パレチニ先生はレッスンの中で、表現は自分に委ねられており、先生が仰る事は一つのアイディアである為同じように弾かなくても構わないんだ、という事を仰っておられましたが、レッスンでは楽譜から導き出した表現を、熱心にまた細かく指導して下さいました。

私はグリークの「ノルウェー民謡による変奏曲形式のバラード」をレッスンして頂きました。今まで本番でも演奏している曲でしたが、今回見て頂いた事で新たな視点に気が付いたり、また"最初の数小節だけでも自分のアイデアを聴いている人にはっきりと伝え納得させなければならない"という先生のお言葉に、自分自身曖昧にしていた部分も自覚する事が出来ました。

聴講もさせて頂きましたが、パレチニ先生は学生自らの表現を聴く事を望んでおり、「ピアニストが成長

するのは自分の考えを見せる時」というお言葉は、自らの音楽に対する姿勢を再度考えるきっかけにもなりました。

世界の第一線でご教示されているパレチニ先生のお言葉はどれも心に残るものばかりでした。今回の経験を、今後の勉強に糧にしていきたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

大学院 2 年

10 月 15 日、ピオトル・パレチニ先生のレッスンを受講しました。

私はスクリャービン作曲 24 の前奏曲作品 11 から第 1～7 曲をみていただきました。パレチニ先生は「言われたことを再現するのではなく、あなたの考えを表現してください。僕はそのためのヒントを出します」とおっしゃり、「慎重になりすぎず、もっと自由に」「まるでアイデアが次々に溢れてくるように即興的に」「同じフレーズは毎回違うアプローチを」などたくさんのことを教えてくださいました。「ピアノを弾いていない状態で楽譜をよく見て、どう弾きたいか、どんな物語があるのかを考える時間を持つ事が大切」というお言葉もとても印象的でした。

今回のレッスンを通して、楽譜を表面的に読むのではなく、楽譜の中に隠された作曲者の意図や想いを感じ取ることが大切であることを学び、それを表現するために、楽譜、そして音楽と真摯に向き合っていると思いました。

パレチニ先生、通訳をしてくださった江崎昌子先生、貴重なレッスンの機会を作ってくくださる先生方に心から感謝申し上げます。

大学院 1 年

特に印象に残ったアドバイスは、「ピアニストではなくアーティストになってほしい」です。ピアニストはピアノを弾く人、アーティストは聴いている人に自分の表現したいことや考えていることを伝えられる人、とおっしゃっていました。私はある程度自分のやりたい音楽を伝えられていると思っていましたが、まだ伝わっていない部分があるのだと痛感した瞬間でした。

もっと 1 つ 1 つの音にこだわって、日々練習していきたいと思います。

大学院 1 年

僕はパレチニ先生のレッスンを受講して、「ピアニストは自分がどう弾きたいかをよく考えている時が 1 番成長する時だ」という言葉が印象に残っています。僕がレッスンで見えた曲は、シューベルトが晩年に作曲した作品です。パレチニ先生は、この曲には楽譜に書いてある強弱記号だけじゃ表せない、シューベルトの想いが沢山詰まっていて、それを自分なりにもっともっと読み取って表現しないとイケない」とご指摘下さいました。レッスンでは、実際に先生が弾いてくださったりして、その為のヒントを沢山下さいました。そしてその日は他の受講生のレッスンも聴講させて頂いて、先生が最後に言われていた、「ピアニストはアーティストにならないといけない」という言葉にとっても感銘を受け、考えさせられました。これから自分が勉強している曲、作曲家、そしてそれに対する自分の想いをもう一度見つめ直してみようと思いました。

大学院 1 年

楽譜通りに弾かなければいけないが精密に弾けとはどこにも書いておらず、音が抜けてはいけないが一音一音をしっかりと弾く曲ではない。

それぞれ対極にあるこれらの要素を、いかに一曲の中に落とし込めるかが重要なのだとレッスンを通して感じました。

そのためには、常に自分の音を聴き、妥協せず、音作りをしていく事が必要であり、今の自分に1番足りていなかったことだと自覚することができました。

楽譜をよく読み解きながら、音作りを中心に、今後この曲の勉強に励みます。

